

有島武郎研究

—「詩への逸脱」をめぐる(六)—

宮野光男

本論は、「有島武郎の詩と詩論」論である。「詩への逸脱」をめぐる(一)～(三)〔梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号～十三号、昭50・11～52・11〕に関連するもので、同題の論文、(四)、(五)〔昭53・11～54・11〕につづいて、有島のホイットマン論「ホキットマンに就いて」〔大9・11〕、「ワルト・ホキットマン」〔大12・2〕の分析を試みたものであり、有島とホイットマンとの関係を、その著作集のエピグラフとして付されたホイットマン詩との関わりにおいて説明しようとしている一連の考察である。「詩への逸脱」をめぐる(二)～(三)〔以下統行予定〕のための序論にあたる部分であるが、いまは発表の順序にしたがって、一応、(六)としておくことにする。

すでに有島の「草の葉」論〔「詩への逸脱」をめぐる(五)〕とその展開において見てきたように、有島にとって、存在の完全さとは、魂の絶対性の謂でもあった。ホイットマンのなかに、その完全性を見るとときに、ホイットマンは大文字化された存在となり、そ

の可能性を見るときに、有島の可能性を、内に秘めた一人の先駆者として登場することになる存在であった。もち論、前者の場合、その根拠を問えば、絶望的たらざるをえない有島であつてみれば、後者に力点がおかれて説かれるもの当然のことなのである。有島の第三番目のホイットマン論である「ホキットマンに就いて」が、徹頭徹尾ローファ論で終始しているのもそのためにかがいない。なかでも、ホイットマンを詩人としても、人間としても未完成Vであるところの一人の先駆者Vとみているところは、その具体的な顕われなのである。

人には完成はなく、少くとも完成はあつてはならぬ。飛躍から飛躍への道程が私共の生活であつて、その頂点は私共の生活ではない。これがいつでもホキットマンの抱いて居つた大なる主張です。

△彼は明かに未成品ですVというところには、有島の、可能性追究の可能性への願いがこめられているということができよう。この

時期の有島のホイットマンについての発言に、△先駆的▽（「生活と文学」大9・4〜10・3）、△創始者、健全なる胚子、自由な源泉▽（『ホキットマン詩集』第一輯広告文 大10・12）、△死ぬまで未完成品で終つた―一個の力強く驚くべき芽生え▽（「草の葉」は彼が唯一の自画像）大11・2・26」と、ひんばんにそのことが言われているのも、ホイットマンの内部にある△生長して行くべき生命力▽（「ホキットマンに対する一英国婦人の批評」大11・5）を自らの内面性に重ねて見ようとする有島の思いの切実であつたことを物語っているのである。

* 未完成の存在であるということ、換言すれば、秘めたる可能性をもつた存在であるということは、ローファー論の展開の一特色として述べられている―非正解的存在性―△ホキットマンは自分が誰にも正解さるべき人間ではないといふことを繰り返して述べてゐます▽に通じる論理でもある。

有島はここで、「私の手を握る君が誰であらう」と、「私が書物を読む時」の二篇の詩を引いて、そのことを説明しようとしているのであるが、ローファー論の論理的帰結としての非正解性が、後に述べるように離別の運命の先取りの論理としてだけではなく、文学の表現にかかわる伝達不可能性の指摘にもなつてゐるということ、興味深いことである。

すでに、「往來雜記」（大8・5）のなかにもその一部分が引用されているように、有島によって生活化されているホイットマン詩のひとつ「私の手を握る君が誰であらう」との、

私を離れ給へ―君の手を私の肩から放し給へ、私を卸してくれ給へ、而して君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。（有島訳）

というところには、たしかに、独歩独行を旨とするローファーとしての生き方への徳源がみられるが、同時に、有島がこの詩に見ようとしてゐることは、

然し、これらの諸員を君は危険を冒すことなしに学ぶことは出来ぬ、／何んとなれば、これらの諸員と私とを君は理解し得ないだらうから。／彼等は先づ君から逃げ逃げるだらう、而してその後にも亦―私はたしかに君から逃げ逃げるだらう。／君が確かに私を引き捕へたと思ふに相違ない時、見よ！／君は既に君から逃げしまつた私を見出すだらう。

という数行の詩句からも明らかのように、△逃げ出す▽という具体的な表現をもつて表わされている、捉えられ難さ、つまり理解のされ難さなのである。

ホイットマンが、なぜ理解不可能の存在であるのかといへば、△私は君が想像するやうなそんなものではない、遙かに違つたものだ▽からだ、という彼自身の認識をまずとりあげるべきであらう。△この一大事を忽にしては何の甲斐もない▽ことであり、ホイットマンの存在の内部には△君が幾度も探り当てたと思つては、探り当ててこなつたそのもの―私が暗示したそのものなしには、凡てが何の役にもたたない▽と思われるものがあるからだ、というのである。

人間の普遍性、等質性を謳歌し、平等主義を標榜するホイットマンにしてこの表現のあるのは、一面意外でもある。

しかし、有島が、さらに「私が書物を読む時」を引いて、その説明をしようとしていることは、おそらく、「廻転する地球の歌」の第三歌―著作集第七輯「小さき者へ」のエピグラフにうたい出されている言語表現の限界性の認識、あるに、「表現されぬもの」に現わされている表現不可能―伝達不可能―なものの存在の事実の指摘ということを見ながらの発言であって、このところに、ホイットマン自身の詩人としての限界状況認識と、それに共感している有島の詩人性とを見ることができるよう思われるのである。

私が読む時、有名な伝記を、／而してこれが（と自問自答する）著者が一人の人間の伝記と呼ぶところのものなのかと。／而してそのやうに誰かゞ、私が死んで世を去つた後、私の伝記を書くことだらう。／（恰かも誰かゞ私の生活のちよつぱりでも本当に知つてゐたかのやうに、／所が、私自身すら、屢々考へることだが、自分の本当の生涯を全く知つてはゐないといつていいのだ。唯僅かばかりの暗示―僅かばかりの、散漫な、かすかな示唆、／それを私は、私の用途の爲めに、こゝに書き記さうとするだけだのに）〔有島訳〕

△所が、私自身すら、屢々考へることだが、自分の本当の生涯を全く知つてはゐないといつていいのだ、とは、おそらく、一方では未完成の存在であることの認識を―換言すれば未来における可能

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐる一―

性をもつたものであることを表現しているのであろうが、このところには、人間の内面性にある表現不可能性の、ホイットマンの表現を見ている有島の共感が、その背後に存在していることを表わしているにちがいないのである。

おそらく、このところに、椎名麟三のいう、△一つの作品が芸術的であるかどうかということ、△表現不可能なものに関係をもっているかどうかによつてきまるといっていいのだ、という意味での、人間理解と、その表現方法発見の苦悩の表明を見ることができるようであらう。つまり、先に掲げたホイットマン詩からも明らかであるように、表現の不可能性ということは、人間存在を根底的に支えている、伝達不可能なものとの関わりにおいて捉えることのできる問題を内包しているのである。それは、ホイットマンと永遠なるものとの関わりの問題である。

この問題は、先にも述べたように、有島のホイットマン論の基本的な間でもあるが、そのことは、この詩の後半の部分―△唯僅かばかりの暗示、△以下が著作集第十輯「三部曲」のエピグラフとして取り上げられていることによつて、このなかに収録されている三篇の戯曲の解釈にも、ひとつの有力な手がかりを与えているように思われるのである。つまり、人間の△窮極の深みにまで投げ込まれた―測鉛、△「表現されぬもの」によつて、△なおも何かが、詩歌の声でも活字でもまた語られていない―何かが欠け（たぶん最上のものが来た表現されず、欠けており、△同前）という状況を発見する可能性が示されているように思われるのである。

人間存在の内面に秘む表現不可能性について、その未完成性と、伝達不可能なるものの存在との関わりの両面からその可能性について考えてみたのであるが、有島は、この問題にいかなる答を見出すことができるのであろうか。

有島は、おそらく、△詩人とは、その表現の材料を、即ち言葉を智の生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて内部生命の発現を端的にしようとする人である▽。「惜みなく愛は奪ふ」にもかわらず、△愛の要求に対する私の感受性が不十分であるから—私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい程の廻り道をしなければならぬ▽ゆえにと答えるであらう。つまり、愛—△個性の生長と自由▽とであり、△人間に現はれた純粹な本能の働きのV—に対する△鋭敏な感受性▽の欠如が、△言葉を飛躍してその後ろの実質に這入りこむこと▽を不可能にしているのだ、というのである。つまり、有島にとつて、表現不可能性ということとは、愛の不可能性ということだということなのである。

このことは、奪う愛論理に対する有島自身の一種の批判と見ることができのではないだろうか。△米川正夫氏に▽というサブタイトル¹の付けられた「愛」〔大9・8〕のなかで、△私はあの感想文〔「惜みなく愛は奪ふ」〕を活字になつた後読みかへして自分であらういふ発見をしました。それはあれは私の内部生活の偶像破壊の爲めに書かれたものであつて偶像建設の爲めにはないといふことで▽と語つている有島を想起することができるのであるが、それは△最上の言葉を語るよりさらに良いこと▽があることの、逆説的表現でもあろう。

その意味では、以下にとりあげる有島のホイットマン論は、いわば表現可能なホイットマンの詳細な記述であり、それは、あくまでも、表現不可能性を本質として内包している、もうひとりのホイットマン発見のプロセスだということになるのである。

△かうなると今夜私のする一番いいことはここで演壇を下つてしまふことになりまふ▽—追隨者を許さぬホイットマンであることを述べた有島のこの感懐は、あなたがち外交辞令だけではない事実を含んでいるように思われるのである。

二

「草の葉（ホキットマンに関する考察）」論における魂論が、「惜みなく愛は奪ふ」では個性論化していることについては、すでに述べたところであるが、「ホキットマンに就いて」も、その文脈を受け継いだものであることは、ホイットマンの特色を五項目にわたつて述べているところで、その第一項目に△個性の主張▽をあげるところから明らかである。

もち論、この個性論が、ホイットマンによつて觸発されたものであることはいうまでもないことであるが、有島は、ホイットマンの、△詩的な形式に於て、拘泥する事なく、私自身の肉体的な情感的な智的な美的な、個性を忠実に申し出し、表現しようという感情、或は大望—此の現在の驚異すべき精神と事実の真中にあつて、これに共鳴し、場所と時としつくり当て候つた個性を今迄のいかなる詩、若しくは書物よりも一層、明確な普遍的な感じを以て、探り出さうとする大望▽をもつた、△私も亦、私なりに巨匠であらうとす

る、来去に任せて感情に満ちた詩を作り、自由の詩を歌ひ、個性を表現しようとした詩人であることを、その特色として述べているのであるが、これこそ、まさに「惜みなく愛は奪ふ」の個性論の論拠として位置づけることのできるものにちがいないのである。

*
△個性が実在の基礎である、という考えかた、△凡ての存在の根底になつてゐる所の個性▽認識は、一面において自然主義思潮の否定理論に通じるものでもある。講演「生活と文学」〔大9・4・10・3〕に展開している△ナチュラリズムの魔術からの解放▽がその顕現であり、△私達が真の文学として要求すべきものは、芸術の個性的要求が、真に徹底し、真に飽満し、真に表現されたものでなければなりません▽という主張となつて表わされているのも、そのひとつである。

それを、ホイットマン詩に即していえば、「Carol of Words」〔「廻転する地球の歌」(2)〕、「ぼく自身の歌」(4)、(4)、(4)、「大道の歌」(5)を通して、△凡ての存在に根ざしする個性の権威▽の△表現▽、△凡ての個性は独立したままで他の個性と共存すること▽の可能性、△(個性)の未来には永遠の時間と勢力とが發展せらるべく伏在してゐる▽という意味での永遠性などが語られ、△個性に本當に飽満し得たもの▽の、ひとつの典型としてのホイットマンが紹介されているのである。

先にも述べたように△魂▽の△個性▽の背景には、人間の側面の強調があることは否めないところである。個性論が、ローファ―

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐる一―

たるホイットマンの特色の筆頭に掲げられているところからもそのことは言えよう。しかし、そのなかにあつて、△個性▽が、△その独立の存在にまで、永遠の時間と勢力とを以て創り上げられた▽ものである、というところに、「ワルト・ホイットマンの一断面」〔「草の葉」論以来、一貫して主張しつづけられている人間の不滅性への憧憬の顕現を見ることがのできるのである。つまり、本質的には、先に指摘した△魂の絶対性▽についての有島の主張にも見られるように、この個性論が、「草の葉」論における魂論の影響下にあるものであることを否定することはできないのである。ということとは、この個性が、再び魂へと転化する可能性をもっている、ということでもある。「文化の末路」〔大12・1〕において、△個性の要求の鋭く叫ばれる文化の到来を慎しめよ。私達の持つ文化は実に極端なる個性の要求によつて生み出されつつある文化ではないか▽といい、個性の生み出した文化の限界を指摘している有島であるところに、そのひとつの顕われを見出すことができるのである。

△しかし、個性の独立と要求とを極端に徹底的に要求したのは▽有島だったとはいうものの、△永遠の叛逆者▽であることを要求する個性は、末路を迎えた文化の可能性を信じることの偽瞞であることとを、△従来の生活の延長が破滅の深淵へのひた走り過ぎない▽ことを明らかにし、有島を△不思議に朗らかな然し淋しい空の下▽に見出させる働きをもっているものでもあることを知らなければならぬのである。

△個性が存在する限りの叛逆▽〔「永遠の叛逆」大12・1〕を通して、有島の到達せんとしている△聖堂▽〔「詩への逸脱」大12・

4」が、△魂の象徴としての「詩Vの世界である」というのが有島の個性論の、ひとつの帰着点であることを想起するときに、そのことを明らかにしている「詩への逸脱」のしめる位置の重要さが問題となってくるのである。

三

「ホキットマンに就いて」が、「惜みなく愛は奪ふ」や「内部生活の現象」の文脈に属することを、直接的に表わしているのが、△愛V論である。

しかし、興味深いことに、有島は、自らの愛の特色を語る場合、しばしば引き合いに出しているホキットマン詩、△自分は嘗て愛した。その愛は酬いられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだV「惜みなく愛は奪ふ」(10)という詩篇、すなわち、『惜みなく愛は奪ふ』の二つのエピグラフのうちのひとつ、「時たま私の愛するものに対して」が、用例として引かれていないのである。たとえば、有島のもうひとつの愛論「愛に就いて」(大11・10)でも、△本能的の愛が働き掛ける時は奪つた場合には完全に彼に所有される―奪ふところの愛Vが、このホキットマン詩とともに語られているにもかかわらず、である。

このところに取り上げられている詩篇は、「ぼく自身の歌」(4)の一部、著作集第一輯のエピグラフである「あなたに」、「青いオンタリオの岸辺で」(10)の一部、「ぼくが非難されたのだそうだ」、著作集第八・九輯「或る女」前・後篇のエピグラフにその後半部がと

られている「ある卑しい姪売婦に」、「包帯を巻くのがわたしのつとめ」(1)の一部、「ぼくは充電されたからたを歌う」(4)の一部、「ワルト・ホキットマンの一断面」以来取り上げられている「リンカーン大統領の追憶」、「いつまでも揺れやまぬ揺籃のなから」などである。

これらの詩群の特色は、個々の詩については多少の差はあるにしても、無条件の、無制限の、絶対受容を表わしている愛が歌われていることである。とくに、エピグラフとして採用されている詩に、その傾向は顕著である。「惜みなく愛は奪ふ」を直接受けていると思われるこのホキットマン論であるにもかかわらず、なぜ、ここで奪う愛の論理のなかで引用されている詩が取り上げられていないのであろう。

そのことは、おそらく、ホキットマンの特色として△健全性Vを取り上げていることに関係があるのであろう。

有島は、ホキットマンの健全性を、△結局人生の可能性(△)高唱V、△常によりよき現在を持ち続けて行きつゝあるという主張Vであるという。つまり、それは、△向日性Vということばで表わすことのできる人間肯定論である。そして、△人生の可能性を力強く證拠立てるVホキットマンの存在が可能にするものが△愛Vだ、というところに、有島は、自らの愛の不可能性を越えることのできる、もうひとつの愛の論理を見ようとしているのである。

有島の、この愛の論理が、先に述べた△未完成V者ホキットマンの愛を語るには、ふさわしくないものであることに留意すべきである。人間が△直下に愛と相対し得べき一路を開くことができる

のは、△深い愛の体験者▽である△詩人▽だと有島は述べているからである。そこには、もはや愛の不可能者は存在しない。そして、それはすでに△神▽でもある。

このことは、有島が、愛の不可能を説いて奪う愛の論理を批判すると同時に、愛の可能者―あえていえば与える愛の可能者を想定することによつて、奪う愛の論理を越えようとしているものであることを表わしているように思われるのである。

四

△あるが儘で凡ては驚くばかり神秘的です▽、と有島はいう。詩人は、△新しい目▽で事物の奥底に隠されている神秘を発見し、それを表現することのできる存在であり、たとえばホイットマンは、△大きな海原を―ばい帆を擧げて走つて行く―一隻の船、それはそのまま、一つの神秘であり；象徴であり；或る屈竟な暗示を（彼の）魂に刻▽むことができることのできる―つまり、日常性、具体性のために、生命の神秘とその可能性を発見し、それを表現することのできる詩人のひとりだ、というのである。

△内的な生命によつて力づけられてゐる―言葉▽によつて表現された日常生活の、△世人が平凡なものと見慣はしてゐる事物も思想も、その儘に神秘的なものであ▽るといふ有島にとつて、神秘性とは、人間の内部生命の発露、換言すれば△魂の流射▽（「大道の歌」）そのものの謂でもある。また、△生産の大きな源である力としての女性▽のなかに△一つの神秘▽を見ることができたホイットマンの神秘観を、有島が諾つているのも、△生は創造である、常に

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐつて（内）―

新しい世界への突進である▽（「繰り返しの生活を憎む」大11・6）という有島の、内部生命論と、本質において響きあうものをもっているからである。

しかし、「涙」を、かつては、△内部の分裂の統一されん事を待ちこがれてゐる―魂▽（「草の葉」）の流す涙として取り上げた有島が、神秘論のなかでは、△暗闇の中で涙を洩す―異形▽であるところの△亡霊▽の涙として捉えているのは興味深い。あたかも、「揺れやまぬ揺籃のなから」のなかで歌われている、雌鳥を失つて魔神と化した雄鳥の△影▽の△囀り▽にあわせて、△意味深く―いひ送られた―凡てに立ちまざつた最後の言葉▽を囁く海の波の囁きのような趣きを感じることができるところであるが、それは、△「聖なる死の囁き」▽―△それがさゝやかれるのを私は聞く、／夜の唇のざれ言葉―絹ずれを思はず饒舌、／静かに登つて来る聲音―神秘なそよ風、ひそかに低く吹いて来る、／見えざる河の蓮―流れ、永遠に洗れる潮の流れ、／（それともあれは涙の蓮か？人の涙の果てなき海原の）▽と歌われている―でもあろう。

「大道の歌」(7)の一部、「涙」、「聖なる死の囁き」の詩篇を引きながら、有島は、ホイットマンのなかに△象徴派の詩人に見るやうな格調▽があると述べているが、△深い神秘に対するパルス▽への共感とともに、鋭敏な感受性は、ますます有島の内部にあつてとぎすまされ、愛の可能者への、換言すれば、表現不可能な存在への思いをつのらせていたように思われるのである。

『ホキットマン詩集』第二輯(大12:2)に併載された「ワルト・ホキットマン」は、有島の最後のホイットマン論である。

取り上げられている詩の量が、先の「ホキットマンに就いて」の約三分の一であることは、一面において詩集に付された解説であることとからくる当然の結果であるが、ここでも、ホイットマンがロープラーであることの主張が主調音であることに変わりはない。ただ、変化したことといえば、△ホイットマンが、魂とか個性とか心とかといったものから非常に実在的なものへと移ったこと△なのである。

「ホキットマンに就いて」において、すでに触れられていた歴史的事実への言及は、全般的には要約されたかたちになってはいるが、新資料△遺存してゐる文書△によって、空白であった十九才当時の詩の習作の事実を伝え、「辛薄きわが愛欲はまだ見ぬ人にこがれ寄る」、「揺り動きやまぬ揺籃から」、「群衆—その海原のさかまく波間から」などの詩篇の具体的な背景を、当時の手記や、周囲の人々の回想などを用いて明らかにすることによって、さらにその密度を増しているようである。そのことは、有島によって、△ホキットマンが潜らねばならなかつた内外の大きな事件殊にその悲恋は、彼にとつて優れた多数の詩の母胎をなした△と総括されているが、おそらく、この発言の背後には、先に述べた「惜みなく愛は奪ふ」のエピグラフのひとつ—「時たま私の愛するものに対して」—を予測することができるのであるが、ここでも、奪う愛の論理は展開されていないのである。

ところで、「ホキットマンに就いて」において言及されていた△個性△、△具象性△、△健全性△、△愛△などの特色は、それぞれ具体的な事柄に結びつけられて説明されているが、△神秘性△に関しては、いささか希薄化されているようである。それは、多分、このホイットマン論の特色である事実性とともに、その△宣言△性によるのであろう。

有島は、すでに「ホキットマンに就いて」のなかで引用されている△三四才の時の手帳△の一節△：詩的な個性を忠実に言葉に表現しよう—この年代、この土地にあつて、特殊な個性を今までの如何なる詩人よりも、如何なる書物よりも、更に確実で普遍的な意味に於て探突しよう—ということだつた△を再び引いて、△この言葉は一つの立派な宣言である△と述べているが、このホイットマンの△大望△は、有島の個性論に重ね合わされて、有島自身の大望を述べているところであると同時に、有島の△宣言△でもある。

△詩人が恋の味を知るのは虎の子が血の味を知つたに等しい△、△彼の表現は在来の旧套を脱してはじめて彼自身のものとなつて来た△、△彼は遂に理想主義の幽霊たることから彼自身を救つた。概念の奴隷たることから彼自身を解放した△……おそらく、ホイットマンのこととして述べられているこれらの特色は、先に引いた△個性の表現△者たらんとした者であることを中心とした有島の願ひであり、有島の現実であつたにちがいないことは、「詩への逸脱」を見れば明らかである。ここでは、機縁としての出来ごと—おそらくそれは恋であろう—表現としての象徴、形式としての詩、詩的個性、特殊な個性と表わされている魂が、まさに△具象化△された世

界が待望されているのである。

△それは無限の天空を背景とした一つの星座の荘嚴と微妙とを連想Vさせる世界だ、と有島はいう。それは、ちよとど、「星座」のエピグラフに歌われている、△「大地—大地は自足してゐる」△私は星座等が更に近くにありべき必要を見ない、△私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、△それらに属するものはそれらに満足してゐるのを知るV「「大道の歌」(1)の一部」世界への憧憬の表現でもあらう。

*

「ワルト・ホキットマン」の宣言性を、もつとも顯著なかたちで表わしているのは、その結末の部分である。

彼はかくて先行者を有せず、従つて追隨者を退けた。彼の追隨者たらんとするものは、その瞬間に彼を見失つたであらう。彼は自由の中に住む人間の可能性がどこまで行き得るかを彼自身に於て表現したのだ。

然しもう私は彼を離れて行かう。彼の時代には、彼がなければならなかつた。而して今の時代には、それにふさわしい詩人が要求されてゐる。人は常に生きつゝ常に死につゝ、あらねばならぬ。而して常に死につゝ、生きつゝあらねばならぬ。

彼をして彼の道を行かしめよ。それを妨げるな。私達は私達の道を行かう。彼をしてそれを妨げしめるな。

△裸かなる眞実、いつはらざる誠実を三人は知つた。不俱戴天の

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる一 —

敵であり、同時に情を等しうする殉教者たる三人は、過たず躊躇はらず各々の道を行かねばならぬVとは、「宣言」の△B Vの△宣言Vであるが、この言葉の背後には、「ワルト・ホキットマン」の結末の部分と同様に、「私の手を握る君が誰であらうと」のなかで、繰り返し言われている、△私を離れ給へ、さうして君の行くべき道に向つてこゝを去り給へVという、独歩独行への徳憑と、「大道の歌」のなかで、△さあ行かう！私達はこゝに停つてはゐられない！V、△彼等を妨げるものを取り越えて、さあ行かう！躊躇するな！Vという激しい誘いを見出すことができよう。そして、それに従おうとする、一種の決意表明が、△もう私は彼を離れて行かうVに表わされているのである。

「ワルト・ホキットマン」には、「宣言」との類似点がある。

△人は常に生きつゝ常に死につゝ、あらねばならぬ。而して、常に死につゝ、生きつゝあらねばならぬVという一節が、著作集第二輯「宣言」のエピグラフ、「おゝ常に生きつゝ常に死につゝ」をふまえたものであるが、このホイットマン詩が象徴的に表わしているように、新生の世界において、初めて可能になる、生と死との絶対矛盾の同時的存在の可能性が、詩人としての生きかたのなかに求められているところに、それを可能にする新生への願望が表わされているように思われるのである。

もち論、この結末の部分、それにもかかわらず、有島の否定的結末の表明であるという読みかたが一般的であることは否めない。しかし、「宣言」が有島の作品であるという意味で、たとえ、その

結末が人生の可能を追究しつつ、その可能性への希望を強く表わしていたとしても、本質的には死の告示であるように、「宣言」に形象化されているものが、人生の不可能の可能を求めてやまぬ^{あと}へ懐がれVであるとするならば、それと等質の表現は、いかに現実的な死に間近くとも、それは、新生への希望であるにちがいないのである。

なるほど、有島にとつて、△そこに行く道は疑はしい―結果は怪しい、ひよつとすると破滅V〔「私の手を握る君が誰であらうと」〕かもわからない。しかし、ホイットマンのいう新しい価値の世界、新しい人間関係に入るためには、△もう私は彼を離れて行かうVという決意は、あえて冒さなくてはならない、最上の決断なのである。ちようど、最も望ましい詩の世界への飛躍を、△詩への逸脱Vとしたように、それは、最上のものへの決断の逆説的表現といふことができるところのものなのである。

それは、先にも述べたように、表現可能なホイットマンの姿を詳細に描き出すことによつて、表現不可能なホイットマンを明らかにする方法であつたのかもわからない。その意味では、△もう私は彼を離れて行かうVは、一種の幻想の世界への彷彿を予言する言葉だといふことができるのではないだろうか。

註1 「演劇難感」昭38・7

註2 「有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐるつて 四―」なお、

鈴木鎮平氏はこの問題を△ホイットマンの魂の真相を結局は理解できなかったV有島として捉えている。「『教育研究』

第11号・昭46・2」

註3 岡田愛子「有島武郎とウォルト・ホイットマン―その邂逅・

有島におけるホイットマンの変遷―」〔「国語と国文学」昭36・10〕

註4 それが Emory Holloway 編の *The Uncollected Poetry*

and Prose of Walt Whitman であることの紹介が、亀井俊介「有島武郎とホイットマン」〔「近代文学におけるホイットマンの運命」昭45・3 研究社刊所収〕にある。

註5 「有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐるつて 四―」

註6 註3、4に掲げた論の外に、鈴木鎮平氏の、前掲結末部分を

△この訣別の言葉こそは、十九世紀のアメリカ人として終始したホイットマンの限界の中に、恐らく二元の分裂を綜合できずに終るであろうおのれの姿を見出した有島武郎の冷徹さがつぶやかせたものであらう。「中略」これは、ホイットマンへの離り状であつたと同時に、有島武郎の予期もしなかつた辞世の句ともなつてしまつたわけである。Vと捉えた意見〔「教育研究」第12号、昭47・2〕や、小泉一郎氏の、有島が、ホイットマンの△神秘主義にいちじるしく接近しながら宗教性を拒否Vするものであり、△ホイットマンは武郎にむかつて絶えず静かな「死の讃歌」をうたつて聞かせることによつて、結局彼を「死の確実な手」に抱きとらせることにな大きな役割を演じたV存在であつたという意見もある。「〔「有島武郎とホイットマン」〕「神と人とのあいだ」昭50・2 笠間書院刊所収」